在宅のまま心臓病チェック

CATVでデータ送信

双方向のケーブルテレビ回線で常時、健康管理します。香川県さぬき市で高齢者の心電図など健康状態に関する情報を毎日、保健師がチェックするシステムが活躍している。医療データとしても貴重で、気温と血圧の関係が分かるなど成果があがっている。

このシステムは同市の在宅管理を希望した高齢者約五百人を対象に行っている。心電図、血圧など健康状態に関する情報が家庭に置かれた端末から市のサーバーに送られ、保健師が毎日チェックする。すべての情報はISDN回線を通じて香川医大に送られていて、必要な症例は専門医が詳細に検討し、かかりつけ医の診察を受けるようにすすめる。

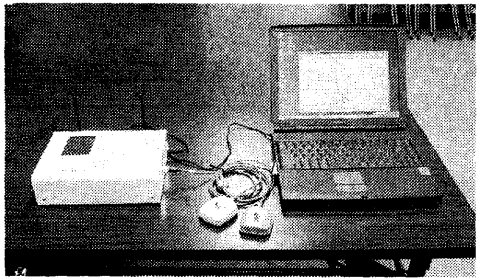
病院に来たときだけでなく、日常生活の中での変化がわかる。

ある六十歳代の男性は毎日、送信される心電図の波形に異常がみつかった。心臓の収縮直後の波形が乱れていたのだ。前の月にはなく、心筋梗塞の恐れがあった。そこで病院に行き、治療を受けて事なきを得た。

貴重な医学データも得られた。

医学部医療情報部の原量宏教授は健常な高齢者十五人に対し、県の過去三年間の気温と血圧との関係を調べた。その結果、気温が一度上昇すると、収縮期の血圧が0・48下がることが分かった。

さらに妊婦の胎児心拍数・波形をインターネット回線で医療機関に送り、胎児の健康状態を常時チェックできるモバイル（携帯）コンピューター利用のシステムも開発している。

原教授は「電子カルテのシステムと統合できるような形で活用していきたい」と話している。

香川医大が開発した妊婦のモバイル診断機器。中央の端末で胎児の心拍などを測る